



高校生留学



マッギル大学 名誉教授

高根芳雄 (たかね よしお)

東京大学文学部心理学科卒業。Ph.D (ノース・カロライナ大学)。マッギル大学で教授等を歴任。現在、ビクトリア大学でAdjunct Professor。専門は計量心理学。著書は*Projection matrices, generalized inverse matrices, and singular value decomposition* (共著, Springer) など。

前哨戦

これは私が大学で心理学を専攻することになるうとは夢にも思っていなかった頃の話である。したがって本文の趣旨とは一見無関係のようにも思えるが、その後アメリカの大学に留学し、カナダの大学で教えることになった源流を辿っていくと、どうしてもこの時の体験に行き着かざるを得ない。

私は1963年の夏からほぼ一年間アメリカ留学を果たした。当時私は都立小石川高校に通う高校生だった。「果たした」などという多少大げさに聞こえるが、高校生のアメリカ留学は当時としてはかなり珍しかった。1963年といえば日本もそろそろ戦後20年の節目を迎え、もう戦後ではないという声がちらほら聞こえ始めた頃のことである。ちなみに東京オリンピックは1964年だった。まだ1ドル360円の時代で、私費で留学するなどということは大部分の日本人にとって夢のまた夢という時代であった。

ところが別の意味で夢のような制度が存在したのである。それはAFS留学制度といって英語のヒアリング・テストと面接に合格しさえすれば、殆どただ同然で高校生を一年間アメリカに留学させてくれるという制度であった。AFSはAmerican Field Serviceの略で、もともと第一次世界大戦中に戦争で負傷した兵士の救護団体として発足した。ところがその後戦争で負傷した兵士の救援よりも戦争を起こさない世界を作るほ

うが大切だという考えに変わり、世界的な規模で高校生の交流を図るための制度を作り出した。しかもAFSはどこかの政府にも頼らず、全ての活動は民間の寄付と有志者の奉仕によって支えられている。

私は一も二もなくこの願ってもない可能性に飛びついた。その頃の日本の高校生活といえれば何といても大学受験が重くのしかかり、灰色の高校時代などと呼ばれていた。それに対し時折耳にするアメリカの高校生活の楽しそうだったこと。また当時『パパは何でも知っている』とか『うちのママは世界一』というアメリカのテレビ番組が流行っていて理想的なアメリカの家庭生活に惹かれた人が多かった。私は一時的にも受験の重圧から逃れたいという気持ちとアメリカ生活への憧れから強く留学を希望したのである。さらに私が通っていた小石川高校は進取の精神に富んだ校風で、AFSでアメリカ留学を体験してきた先輩が二年上に三人もいて、直接体験談を聞いたり手記を読んだりする機会があり、私の留学熱はいやがうえにも高揚した(ちなみに小石川高校からAFSで私と同じ年に留学した生徒は他に二人いた)。

しかしAFSの試験に合格するのはかなり難関であるという評判だった。私はアメリカに留学したい一心で、考えられるあらゆる手段を使って英会話の勉強を始めた。その頃ラジオでは『百万人の英語』という番組がありそれを毎日欠かさず聴いた。テープレコー

ダーを買ってもらって番組を録音してそれを何度も繰り返し聴いたりもした。『エデンの東』という映画の脚本を手に入れ、懐中電灯を持って映画館に行き何度も繰り返し台本を追ったり、日曜日には成増(東京都板橋区)にあったグラントハイツ(米軍家族の居留地)に入り込み、あたりで遊んでいる子どもを相手に英会話の練習をしたりした。また当時住んでいた家の近くに王子キャンプという米軍基地があり、夕方、門の近くで帰ってくる米軍兵士を待ち伏せしては自分の英語が通じるかどうか試したりした。またFEN (Far East Network) という在日米軍向けの放送でニュースの聞き取りに挑戦したりした。当時はFENのニュース・キャスターがニュースを読むスピードがあまりに速いのに仰天したものである。こうした努力の結果(?) 私は何とかAFSの試験に合格し、アメリカ留学の切符を手に入れたのである。

渡航

私は1963年8月末、JALのチャーター便で他の130余名の日本人留学生と共に羽田空港を発ちホノルル経由でサンフランシスコに到着した(当時は太平洋をnonstopで横断する便はなくホノルルには給油のため数時間だけ立ち寄ったものである。今更ながら航空技術の進歩には目覚ましいものがある)。その後われわれはバスで2時間ほどのところにあるスタンフォード大学で数日間オリエンテーションを受けることになってい

た。私は当時この大学が世界でも有数のエリート大学であることを全く知らなかった。初めて着いた時、その広大な緑一面の芝生に圧倒されたのを今でも鮮明に覚えている。世界にはこんなきれいなキャンパスをもつ大学があるとは思ってもみなかった。われわれが泊まった宿舎も広々として清潔そのものだった。オリエンテーションの間他に留学生仲間と共に三々五々輪になって芝生に座り、カリフォルニアの涼しい夏の陽光を浴びながらこれからのアメリカ生活について語り合った。われわれのアメリカ生活はスタンフォード大学のキャンパスから始まったのである。

私はここで「貴重な」体験をした。カフェテリアというものを生まれて初めて経験したのである。そこには食べきれない程の食べ物と飲み物だけでも数種類あった。私はそれを全部取らなければいけないのだと思い、毎回トレイいっぱいを取っては食べきれず大部分を無駄にしていた。これは私だけでなく一緒に食事をした仲間全員が同じことをやっていた。後になってカフェテリアでは自分の好きなものを食べられるだけ取ればよいのだということを知った。レジの人もわれわれが到底食べきれないほどの食べ物を取っても一言も文句を言うわけでもなくいつも笑顔で通してくれた。AFSの世話役の人たちからも苦情は一切出なかった。どうせそのうち分ると知っていてわざと何も言わなかったのではないかと思われる。この話は今では笑い話になっているが、われわれはカフェテリアの使い方さえ知らなかったのである。われわれはこの後行き先の違う少人数のグループに分かれてアメリカの各地に分

散し、home stayする家庭に引き取られていった。

アメリカ側のAFSは各高校、各地域で組織がしっかりできていて、留学生を受け入れるための資金集めや、いろいろな行事の計画、受け入れ態勢の準備などが綿密になされていた。飛行機代は航空会社の寄付、生活費は原則として留学生を受け入れる家族の負担、通学費は留学生が通う学校の負担と役割が分担されていたが、生徒たちは自分たちの負担を達成するために空き瓶の収集など涙ぐましい努力をしてくれていた。私は今でも、見ず知らずの留学生のためにそれ程まで努力してくれたアメリカ人の寛大さに感謝の気持ちでいっぱいである。

いざ学校へ

私のhome stay先はワシントンDCの北側に位置するメリーランド州だった。私はアメリカ中西部、北東部に行く仲間たちと一緒にプロペラ機でサンフランシスコを発ち、途中で中西部に滞在する留学生を下ろしながらニューヨークに着いた。ニューヨークからさらにバスでワシントンDCに向かった。これは実に長い旅だった。日本からアメリカの西海岸までは12時間ほどの旅だったが、アメリカ大陸の横断には丸一日もかかった。アメリカの大きさを実感した旅であった。

学校は着いて間もなく始まった。私が通ったのはWheaton High School (WHS) という在校生2,400人のマンモス高校だった。この地区はDCの連邦政府で働く人たちのベッドタウンになっていて、当時人口が猛烈な勢いで増加している地域だった。当時アメリカでも有数の富裕地区といわれ、教育に力を入れていた。それだけにacademy courseからvocational

courseまでカリキュラムは充実していた。私は高校3年に編入され、英文学、アメリカ史、民主主義の問題点 (POD)、パブリック・スピーチ (PS)、数学、体育、タイピングのコースを取るようになった。この中で英文学の授業には一番苦労した。というより全然歯が立たなかった。英文学の授業ではBeowulfやCanterbury物語などの古典や叙事詩、ミルトンの失楽園、さらにはシェイクスピアのマクベスの購読が要求された。アメリカ人の生徒の中には授業でマクベス夫人のセリフを本物さながらreciteする人もいてびっくりしたが、私といえば日本からマクベスの対訳本を取り寄せて丸暗記し何とか試験を乗り切った（これは後になって自分の苦手なところを如何にカバーするか、いわばcoping strategyを自ら作るための指針となった）。アメリカ史やPODも予備知識がないため結構大変だった（日本だったら小学校や中学校で習う歴史をスキップしていきなり高校の日本史の授業に出るようなものである）。PSも予め準備できるものとはかく、impromptuスピーチはお手上げだった。でもクラスの中にはユーモアのセンスにあふれる生徒もいて結構楽しい授業だった。数学は逆に易し過ぎる程だった。タイピングはキーを見ないでタイプができるようになり、後で大いに役に立った。アメリカの高校では宿題も結構あったりして勉強は思ったより大変だった。私は留学前ずいぶん英語の勉強をしたつもりだった。それは日常会話のレベルでは役に立ったが、アメリカの高校や大学で普通の授業についていくのには不十分だった。と言ってどうせ通用しないならやらなくても良かったかというところではない。むしろこう

した努力があったからこそ何とか無事に卒業できたとも言える。やはり努力の甲斐はあったと言うべきであろう。

私はそれでも学年の最後のほうには700人中成績トップ50人の中選ばれた。もっとも表彰式では英文学の先生に「何故あなたはここにいるの」と冗談を言われた。私の隣にいた友人は先生が私にずいぶん失礼なことを言うと思ったらしく慌てて「彼は言葉のハンディはあるものの数学では天才的な才能を持っている」と私自身が赤面するような弁明をしてくれた。先生は「わかっているわよ」と言って私にウインクした。私もこの頃にはこれ位の冗談は分かるようになっていた。

勉強には少々苦勞したが、WHSの一年は充実した一年だった。一年を通していろいろな行事が計画されており、勉強以外でも忙しい一年だった。フットボールの試合の見学や、DCの観光名所の見学、他国の留学生との交流をはじめとして、home coming dance, senior prom, moonlight cruise等々、日本の高校生では経験できないような楽しい経験をいっぱいした。そんな中で特に印象に残っているのはTP-ingという悪戯だった。ある日の夕方、アメリカン・ブラザーのDaveが、これから校長先生の家を「roll」しに出かけるが一緒に来ないかと誘われた。何をするのかは一緒に来れば分かると言う。私は好奇心旺盛で直ちについて行くことにした。すると既に10人程の仲間が集まっていた。三台の車に分乗、途中でトイレトペーパーをしこたま買いつけて

校長先生の住まいに向かった。ハウス・ロールというのは夜陰に紛れ、誰かの家をこっそりトイレトペーパーで飾り立てる悪戯でtoilet paperingを訳してTP-ingと呼ばれていた。私はとにかく皆のまねをして夢中でトイレトペーパーを木の枝に投げかけた。30分ぐらいで校長先生の家のTP-ingは終わり、われわれは意気揚々と引き上げた。翌日校長先生が何と言うか楽しみだった。ところが校長先生は全てを見通した上でわれわれの行動を家の中から一部始終観察していたらしい。「自分の家が昨日TP-ingされてね、犯人は誰それだ」と、かえって自慢げに皆に吹聴していた。どうやら校長先生はわれわれの行為を自分の人気のバロメーターと解釈したようだった。校長先生は太っ腹でわれわれより一枚も二枚も上手だった。

私がアメリカ留学中にケネディ大統領が暗殺されるという大きな歴史的イベントがあった。それは1963年、秋深まる11月22日午後1時半頃のことであった。私はタイピングのクラスにいた。突然校内放送がありケネディ大統領がダラスで銃撃されたというニュースが流れた。クラスは騒然となったが、その時点では未だ大統領の生死は確認されていないということだった。ところがそれから約10分後に再び校内放送があり大統領の死亡が確認された。多くの生徒が泣き始めた。学校ではその日の残りの授業は全てキャンセルされた。と言ってもすぐに家に帰れたわけではない。普段と違う帰宅時間でスクールバスの手配が間に合

わなかったせいである。スクールバスを待つ間何人かの生徒と話す機会があった。その中には「大統領が死んでも国政にはあまり影響が出ないだろう。何故ならば合衆国憲法は大統領が死んだとき、副大統領がその後を引き継ぐと定めており、国政は滞りなく続いていくだろう、それが民主主義の良いところだ」と、PODのクラスの模範解答のような意見があった。一方で「ケネディ大統領の暗殺を報じた今日のワシントンポストをとっておくと10年後には高い値で売れるぞ」と言う不埒な学生もいた。私はケネディ大統領の暗殺事件が起きたこの頃を境にアメリカの国力が下降に転じたような気がしてならない。

総括

AFSによる高校留学は予想に違わず概ね楽しい日々の連続だった。しかしながら留学による最大の成果はいったい何だったのだろうか。留学による英語力の向上は期待した程ではなかった。もっともこれはもともと私にあまり語学の才能がなかったせいかもしれない。と言うのはAFS同期生の中には宇宙船アポロが人類史上最初の月面着陸を果たしたとき、その実況放送をテレビで同時通訳した鳥飼久美子さんのような人もいるからである。では他に何かあるのか。私が思うにこの留学の最大の成果は外国人ずれたというか、外国人の中でも物怖じしなくなったことにあるのではないか。それがその後アメリカの大学院に留学し、また北米の大学で教えることになった布石になったような気がする。

読者の声投稿募集中! 『心理学ワールド』への、ご意見・ご感想をお待ちしています。投稿は、お薬書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。
●送付先 〒113-0033 文京区本郷5-23-13田村ビル 公益社団法人 日本心理学会



大学院留学



マッギル大学 名誉教授

高根芳雄 (たかね よしお)

東京大学文学部心理学科卒業。Ph.D (ノースカロライナ大学)。マッギル大学で教授等を歴任。現在、ビクトリア大学でAdjunct Professor。専門は計量心理学。著書は*Constrained principal component analysis and related techniques* (Chapman and Hall/CRC Press) など。

前哨戦

前は高校生留学の話をした。この時の経験が私の将来を大きく左右した一因と考えられたからである。今回は主としてノースカロライナ大学 (UNC) 大学院への留学の話をしたい。この時の経験が私の研究者としての礎になったと考えられるからである。今回、本文を書くにあたりこの時期に自分が何をしていたのか思い出してみたら、自分でも感心する程いろいろなことをしていた。研究者の卵として一番充実していた時期かもしれない。

私は1964年夏、約1年に亘るアメリカの留学から帰国した。心配していた大学受験は持ち前の集中力で乗り越え、翌年春、私は晴れて大学に入学した。ところが大学生になったものの、何をしたいのか自分でもはっきりわからなかった。高校生の時から漠然と小説家になりたいと思っていたが、特にそのための準備をしていたわけでもない。入学後1年経って専門を心理学に決めた時も後で小説家になるのなら心理学をやっておいても損はないだろう位の軽い気持ちだった。ところが専門課程に入って間もなく、私は自分の人生を一変させるような「事件」に遭遇した。柳井先生との「運命的な出会い」であった。

心理学科に入って最初に興味を持ったのは実験社会心理学だった。社会心理学を「他の同類の存在や社会制度がもたらす行動の変容を組織的に研究する学問」と規定し、それを実験的に確かめると

いうZajonc (ザイヤンス) の視点に新鮮味を覚えた。本郷に移って間もなく5月祭があった。心理学科として何かeventを企画することになり、態度変化の実験をすることになった。これは当時の私の興味にぴったしの企画だった。ところが実験後、誰かが(ひょっとしたら言い出しっぺは自分だったかもしれない) 態度変化のデータを因子分析してみたらどうかと言い出した。ところが実際にどうしたらよいか誰も知らなかった。そこで当時教育心理学科の主任教授だった肥田野先生に相談したところ、博士課程に在籍中だった柳井先生を紹介された。私は心理学科有志を代表して柳井先生に会いに行った。それが柳井先生との長い交流の始まりだった。当時先生は高度な多変量解析技法を駆使して、個人の学力、性格、興味などから最適な職業進路を予測するシステムの開発に取り組んでおられた。柳井先生は私が持ち込んだデータの因子分析を快く引き受けてくれたばかりでなく、初対面の私に対して熱心に自分の研究について話してくれた。私は生まれて初めて心理学の中にもこういう分野があるのを知り感銘を受けた。私はその後先生に誘われるまま、当時教育心理学科の評価研究室を中心に盛んに行われていた勉強会などに出席しているうちに次第に計量心理学に興味を引かれ、ついにはそれを一生の仕事とするようになったのである。この辺の経緯についてはすでに先生の大学入試センター

退官を記念する文集に書かせていただいたのでここでは割愛する。興味のある方はtakane.brinkster.net/Yoshio/をご覧ください。

柳井先生との出会いによって計量心理学に進むべき道はほぼ固まったが、もう一人私の大学院留学に深く関わった先生がいる。私がちょうど学部3年生の2学期から半年ほど東大の教育心理でテスト理論を教えてくれたクローンバック先生である。先生は言わずと知れたクローンバックの α 係数で有名なテスト理論の大家である。当時、アメリカの心理学者の中で一番高い給料をもらっているという評判だった。その先生が直々にテスト理論を教えてくれるというので授業をとりに行った。講義は英語だったが世話役の東(洋)先生が日本語に通訳してくれた。授業はアメリカ式で宿題もいっぱい出た。それを先生は丁寧に読んで、自分の意見を添えて返してくれた。クラスは最初50人位生徒がいたが、宿題が大変だったせいか学期が終わる頃には5人位しか残っていなかった。私は残った5人のうちの1人だった。先生はそれで私を少しは見込みのある生徒だと思ったのか、学期の最後の頃になって将来アメリカの大学院へ留学しないかと勧められた。私も最初は先生のいるスタンフォード大学に行こうと思っていたが、時間が経つにつれ私の興味はテスト理論よりも多変量解析に傾いていった。結局先生のところよりも若く気鋭な研究

者が大勢いるUNCのThurstone Psychometric Labに行くのがよいだろうと勧められた。UNCに入学の願書を提出した時、クローンバック先生に推薦状を書いてもらった。それから約15年後私は項目反応モデルと離散データの因子分析が同等であることを証明した論文を*Psychometrika* (Takane & de Leeuw, 1987) に発表した。どちらのモデルも1960年代の後半にクローンバック先生に初めて教わった手法である。これは人から間接的に聞いた話であるが、先生はこの論文をとて気に入ってくれたようで口コミでいろいろな人に宣伝してくれたそうだ。私は昔の恩返しができるような気がして嬉しかった。

いざUNCへ

私は1973年、フルブライト奨学金を得て再び渡米した。クローンバック先生と知り合ってから5年の月日が流れていたが、これは東大紛争などのため私の大学院入学が大幅に遅れたせいである。私はハワイ大学で2週間程のオリエンテーションの後8月末UNCチャペル・ヒルに到着した。その年の新しい大学院生は私ともう一人アメリカ人の学生の2人だけだった。着いてすぐに9月から始まる新学期で何をとりか決めなければならなかった。私は先輩大学院生の勧めもあって数理統計学、実験計画法、社会心理学のコースをとることにした。フルタイムの大学院生は4コースとるのが慣わしだったが、数理統計学のコースは週6時間も授業があり一つで2コース分と数えられた。このコースは統計学の基礎を身につけるうえで非常に役に立った。先生はKuebler (キーブラー) という名前で、教え方が抜群に上手な先生だった。学生がどこでつまずくの

かよく心得ていて、懇切丁寧な解説をしてくれた。教科書は今でも名著の誉れが高いJohn Freundの*Mathematical Statistics*で、宿題として奇数番の練習問題を全部解いて提出させられた。それを先輩大学院生のteaching assistantたちが添削して返してくれた。宿題は大変だったが、これで大いに力がついた。こういう基礎的なものは自習できないこともないが誰かに教わってしまったほうが能率がよい。

実験計画のコースは実験データの解析法(分散分析)が主な内容だった。このコースでは仮説検定はモデル比較と同等であることを教わった。すなわち帰無仮説、対立仮説それぞれに対応したモデルがあり、データを記述するのにどちらのモデルを使うべきかを判断することが仮説検定の役割である。この考えはその後多くの場面で役に立った。ここでその詳細を述べる余裕はないが、その考えはUNCで私より1年先輩にあたるMaxwellとDelaneyの*Designing Experiments and Analyzing Data: A Model Comparison Perspective*に詳しい。彼らも私と同じことを学んだものと思われる。

私は授業ではいつも緊張していた。F (fail) を一つとるとたり、L (low pass) を三つとると自動的に退学させられると脅かされた。特に最初の学期は緊張の連続だった。1学期が終わり、AFSで留学した時のホスト・ファミリーのところにクリスマス休暇で行った時、最初は緊張が解けず気分の悪い日が何日も続いた。ようやく気分が晴れたのは滞在して4, 5日経ってからのことだった。

UNCに行って一番よかったことはLabの中に自分のofficeをもったことだった。最初は誰かと一緒だったが2年目からは個室に

なった。寮では全く仕事ができる環境ではなかったので必然的に自分のofficeで時間を過ごすことが多くなった。仕事はLabですという習慣がこれですっかり身についた。私は授業の合間にも自分のofficeにとどまって勉強に専念した。最初の1年はコースワークにだいたい時間がとられたが、夏休みや2年目になると殆ど寝ている時間以外は自分のofficeに入りびたりだった。大体夜中じゅう仕事をし、朝の4時頃寮に帰って睡眠をとり、12時頃にはLabに舞い戻るというのが日課だった。それを2年近く続けた。聞くところによると、ある時期Psychometric Labには変な日本人がいるという噂があったらしい。変な日本人というのは私のことだったに違いない。

アメリカの大学院生活でもう一つ素晴らしいと思ったのはresearch assistantやteaching assistantshipの形で生活費をすべて支給してくれるということであった。そのためアルバイトなど一切せず研究に専念できる。大学院生の時代は研究の芽を育てる非常に重要な時期であり、その大切な時期に研究に専念できたということは何事にも代えがたい貴重な体験であった。

2学期目に入り、私は発達心理学のコースをとった。もともとこのコースは前学期の社会心理学同様、Ph.D.のrequirementとしてPsychometric Lab以外でofferされる心理学のコースを少なくとも三つとらなければいけないという規則に従ってとったコースだった。このコースで使った教科書にKempnerが行った「量の保存」に関する実験結果が載っていた。この研究は年齢の違う子どもたちに縦横の長さが違う長方形を見せて大きいか小さいかの判断を

求め、各年齢層で大きいと判断された長方形の縦横の長さの平均値をグラフ化したものだった。すると年齢と共に大きいと判断された長方形の縦の長さが減少し、逆に横の長さが増大する傾向がみられた。これは小さい子どもは長方形の大きさを判断する時、幅よりも高さにより大きく影響されるのに対し、年齢が大きくなるにつれ両方をより平等に評価できるようになるためと考えられた。私はこれを見た時、直ちに重み付き加算モデルの例にぴったりではないかと思った。当時多次元尺度法(MDS)の分野ではJ.D.CarrollによるINDSCALが脚光を浴びていた。この方法は複数の被験者から集められた(非)類似性データを同時に分析する方法であるが、その基本はすべての被験者に共通した刺激空間の次元にそれぞれの被験者が異なった重みをかけて類似性を判断するために個人差が出るものと考えられる。私は同様の考えがMDSよりももっと基本的な加算モデルでも成り立つのではないかと思っていた。私は自分の着想にすっかり興奮して、すぐに指導教官だったYoung教授に話しに行った。思えばこれがその後、Young教授、当時ベル研究所でpost docをやっていたJan de Leeuw博士(今年UCLAを退職)と共に、データの観測特性と表現モデルを同時に考慮しながら最適なデータ変換を行うという最適尺度法プロジェクトの発端となったのである。重み付き加算モデルの推定はのちに東大に提出した博士論文の一部となった(Takane et al., 1980, *Psychometrika*)。

1975年秋、留学は3年目に入り、私はUNCに提出する博士論文のproposalをすることになった。私はかねてから考えていた対比較における刺激の類似性効果を捉えるモデルを提案した。類似度の高い刺激は類似度が低い刺激に比べ比較が容易で、反応がThurstoneの対比較モデル、ケース5から予測されるよりも極端になる傾向がある。私はそれがケース5で、比較される二つの刺激に対応する識別過程が無相関であると仮定したことによるのではないかと考えた。ところが相関を許すとパラメータが多くなり過ぎて、モデルとして役に立たない。そこである程度の相関を許しながらかつパラメータの数が多くなり過ぎないようにモデルを考えた。この提案は一応審査には通ったものの、のちに私の気持ちが変わって結局博士論文には使わなかった。この時提案したモデルでは個人内で複数の観測値を得るrepeated measurementの特性が捉えきれず十分満足のいくモデルではなかった。この点を克服したモデルに辿り着くには、さらに5年以上の歳月を要した(Takane, 1987)。

私はUNCに行って2年ちょっと経った頃、一時日本に帰国した。東大の時の指導教官だった田中先生から自分はあと1年半ほどで東大を退官するので、将来日本に帰って就職するつもりなら、自分がいる間に日本で博士号をとってはどうかという手紙を頂いた。当時私はずっと北米に居続けるつもりはなかったので急遽日本に帰ることにした。私は1年ちょっとの間に博士論文を仕上げ、1977

年の正月にUNCに舞い戻った。戻ってすぐ今度はUNCに提出する博士論文に取り掛かった。新しい博士論文のテーマは最適尺度法の考えをさらに一歩推し進めた被験者の反応様式と表現モデルを同時に考慮したMDS、その他の多変量解析モデルの開発だった。その年の5月、私はoral defenceを通り、晴れてPh.D.の称号を得た。

総括

UNCには正味2年半滞在した。この留学の最大の成果はいったい何だったのだろうか。私は留学中多くのtechnical skillsを身につけた。こうした知識は勿論重要ではあるが、それ以上に重要なのは研究者としての心構えを身につけたことにあるのではないか。Publish or perishといわれる北米の厳しい環境の中で、いかに研究者として生き抜くか、もっと平たく言えばどういうことをすれば論文になるのかその判断力を身につけたことにあるのではないかと思われる。これはUNCの若い教授たちが自分たちの生き残りをかけて真剣勝負をしている姿を見て体得した術である。これは北米で研究を続けていくために不可欠な要素であった。

付記

本文で引用した文献は前出の私のホームページからdownloadできる。また同じsiteには柳井先生がお亡くなりになった時の追悼文(『行動計量学会会報』2014年6月号)、追悼論文(高根, 2014年, 『行動計量学』)もuploadされている。興味がある方はこちらのほうも合わせてご覧いただきたい。柳井先生との共著出版物は単行本も含めて全部で15に上る。

読者の声投稿募集中! 『心理学ワールド』への、ご意見・ご感想をお待ちしています。投稿は、お葉書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。

●送付先 〒113-0033 文京区本郷5-23-13田村ビル 公益社団法人 日本心理学会



北米での就職



マッギル大学 名誉教授

高根芳雄 (たかね よしお)

東京大学文学部心理学科卒業。Ph.D (ノースカロライナ大学)。マッギル大学で教授等を歴任。現在、ビクトリア大学でAdjunct Professor。専門は計量心理学。著書は *Generalized structured component analysis* (共著, Chapman and Hall/CRC Press) など。

1977年は本当に忙しい年だった。私はこの年の正月にUNCに戻り、1度経験したdissertation proposalのやり直し、博士論文本体の仕上げ、oral defense、就職探し、そして6月にはチャペル・ヒルでPsychometric Societyの大会があった。残りの半年も決して平坦ではなかった。私はこの頃までにはMcGill大学への就職が決まっていたが、カナダの入国ビザを取得するため7月早々一時日本帰国を余儀なくされた。9月上旬にはMcGill大学に着任、私はモンリオールに着いた翌々日から150人の学生を前に実験計画の講義を始めなければならなかった。

Job Hunting

私はUNCに戻った時すでに北米で就職したいという意向を固めていたが、就職探しは困難を極めた。私が自分の希望を伝えると指導教官だったYoung先生は当時北米で活躍する計量心理学者十数人に私を紹介する手紙を書いてくれた。自分のところに近々Ph.D.を取る学生がいるがもし適当な就職口があったら是非知らせしてほしいという趣旨の手紙だった。これに対して数人から返事が来たが、直接就職に結びつくようなものはほとんどなかった。当時は北米でも計量心理学の仕事は極めて稀で、私はAPA Monitorに掲載している広告を見て30ヶ所ぐらい願書を出したが、このうち大部分は分野的にもあまり見込みのなさそうところだった。この中で面接に呼んでくれたのはHouston大

学とCalifornia State大学の2ヶ所だけだった。そしてどちらの大学も私にjob offerをしてくれなかった。

McGillに就職できたのはラッキーだったとしか言いようがない。4月になり就職もほぼ諦めかけた頃、McGill大学のRamsay教授から電話があった。彼は先のYoung先生の手紙に対し返事をくれた一人だったが、それにはひょっとしたら自分のところで計量心理学のpositionが空くかもしれないと書いてあった。それが現実になったのである。私は早速願書を出し、その1週間後面接を受けにモンリオールに行った。その時、私はこの街についてもMcGill大学についてもほとんど予備知識を持っていなかった。私の第一印象は、4月の半ばだというのにモンリオールはまだ冬明け前で何となく索漠とした感じの街だった。ただ街のレストランで食べたステーキがとびきりおいしかったのを覚えている。

大学の面接ではまず自分の研究について1時間ほどtalkをさせられる。このtalkには大部分のfaculty memberが出席していて、研究の内容ばかりでなく、presentationの出来栄え、質問の受け答えなどが評価される。その後十数人の教授たちと個別の面談をする。これはだいたい1人30分ぐらいの枠で次々と面談し、その人の興味に合わせていろいろ質問されたり、逆に質問したりする機会が与えられる。これは1日で終

わらず2日に渡ることもある。夜には数人のfaculty memberと共にレストランで会食する。そこで振る舞いも評価の対象である。したがって候補者にとっては緊張の強いられる2日間となる。

面接が終わると候補者は大学の決定を待つだけであるが、大学のほうは何人かの候補(通常3, 4人)を面接し、誰にjob offerするか決めなければならない。北米の大学では通常positionが空くと、まず5, 6人程度のmemberから成るsearch committeeが学科内に設置される。そのcommitteeが募集要項を定め、提出された書類に基づいて(通常vita, letters of reference, statement of research interest, statement of teaching interestなどを提出させられる)誰を面接に呼ぶか決める。面接が終わると候補者を総合的に評価し順位をつける。その時どの順位の候補者までがacceptableなのかも決めることが多い。Search committeeのrecommendationはさらに学科内の最高議決機関に送られ、さらに審議が繰り返される。そこで承認されれば学科長は学部長に話を持っていき、学部長にも承認されて初めて学科長は選ばれた候補者に連絡を取り、雇用の条件などの交渉が始まる。このように北米の大学では何段階ものcheck pointがあり、自分の領域の人を雇うのでさえ個人の思い通りにはできず、誰かを雇いたいと思ったらそれを皆が納得できるよう説得できなければならない。

これは後で聞いた話であるが、私の場合もすんなりとは行かなかったらしい。Search committeeの会合では私の英語力で果たして授業が満身に教えられるのかとか、統計のconsultantの役目が務まるかといったことが問題になったそうである。また当時私の研究領域とRamsay教授のそれがあまりにも近かったのでそのことも問題視されたようだった。Ramsay教授はそれに対し自分たち計量心理学者にも固有の研究領域があり、計量をやっているからといって学科内のstatistical consultantを一手に引き受けなければならないというのは受け入れ難いと主張したらしい。結局その主張が通って、その時以来McGillの心理学科では専任のstatistical consultantを雇うことになった。私はそのおかげでstatistical consultantをやらないで済んだのである。研究領域のoverlapは必ずしも悪いことではない。むしろ同じようなことをやっている人がそばにいたほうが互いに刺激しあって良い面がある。Ramsay教授はもし研究領域のoverlapがそれほど問題であるならば自分はMDSの最尤解の研究を私に譲ってもよいとまで言ったそうである。私の英語力についてはその後どういう話になったのか聞いたことはなかったが、私は授業が私の弱点と見られないよう準備には万全を尽くした。私はMcGillで教え始めてからほぼ10年後、Psychometric Societyの会長に選ばれた。このことを一番喜んでくれたのは他ならぬRamsay教授だった。というのは彼にとって自分が強く推したjob candidateが計量心理学会の会長に選ばれたということは自分の判断が間違っていなかったことの究極の証だっ

たからである。

McGillがたまたまアメリカでなくカナダにあったのは私にとって二重に幸いだった。一つには強力なライバルが大幅に減ったことである。アメリカ人はアメリカに就職口があるのならやはりアメリカに残りたいという気持ちが強い。アメリカ人にとってカナダの大学に就職するのは都落ちみたいな感じがするのであろう。またMcGillの仕事がopenしたのが遅く、この頃までには有力な候補は皆すでに就職が決まっていたことも私に幸いした。もう一つは私がフルブライトの奨学生だったことに関係する。この奨学制度にはプログラムの終了時点から少なくとも2年間はアメリカに戻って来ないといけないという規則があり、もし私がアメリカで就職していたらこの規則をoverrideするのにかなりの労力を強いられたであろう。McGillがカナダにあったおかげで私は完全にこの問題を免れた。

いざ McGill へ

私は5月にMcGillからjobをofferされ、私はそれを一も二もなく受け入れた。これであとは全てうまくいくように見えたが、そうは問屋が卸さなかった。私はその年の初めに渡米したばかりだったこともあり、最初カナダのビザをアメリカで取ろうと思っていた。ところがそうするには8ヵ月もかかると言われた。そこで7月の初めに急遽日本に帰り、日本でビザを申請することにした。ところが日本に帰ってもビザの取得には最低3ヵ月かかると言われた。大学は9月に始まるので2ヵ月しかない。私は大学が始まるのに間に合わないと思っかく決まった就職がフイになってしまうのではないかと心配だった。何度もカ

ナダ大使館に足を運びこちらの事情を説明しようとしたが、いつも門前払いだった。そこで仕方なく両親が住んでいた地元の国会議員に頼んでカナダ大使館に圧力をかけてもらった。それでようやくminister's permitでカナダに入境できるよう取り計らってもらえることになった。

ところがいざ出発するという日、羽田空港に行くと、私がアメリカを通過するのに必要なtransit visaを持っていないという理由でロサンゼルス行きの飛行機の乗船を拒否されてしまった。私のitineraryではモンリオールに行く途中ロサンゼルスとシカゴの2ヵ所で飛行機を乗り換えることになっており、そのためにはどうしてもtransit visaが必要だということである。これが1ヵ所だけだとvisaは必要なかった。私は何ともやりきれない気持ちで、transit visaを取り、パーになった切符の再手配をし、数日後ようやく渡航にこぎつけた。こうして私は授業が始まる前々日にやっとモンリオールに辿り着いたのである。何とも波乱含みの幕開けであった。

聞くところによるとカナダのvisaの問題は私の責任ではないのでそれによって雇用が解消されるようなことは有り得ず、問題があったのならそれを理由にもっと日本でのんびりしてくればよかったのにと言われた。そうすれば1学期教えるのを免除されたのとも言われた。私はちょっと拍子抜けした思いだったが、現在では新任の教授は最初の学期は教えなくてよいことになっている。

Ph.D.を取ってからどういうところに就職するかはその人のその後のcareerを左右する一大要因である。私はいろいろな意

味で研究環境の整ったMcGill大学に就職できて実に幸運であった。McGill大学は2021年には創立200年を迎える伝統のある大学で、北米でも屈指の研究大学だった。読者の中にはMcGillの心理学科でPh.D.を取った卒業生（現在はUniversity College Londonで教えているO'Keefe教授）が昨年度ノーベル医学・生理学賞を受賞したのを覚えている方もいらっしゃるであろう。McGillの心理学科はfounderのD.O.Hebb教授の影響もあってもともと生理心理学の強い学科だった。1977年当時、この分野ではPeter Milner教授、painの研究で世界的に有名なMelzack教授がいた。近くにはBrenda Milner教授（やはりMcGill心理学科の卒業生）のいるMontreal Neurological Instituteがあった。McGillの心理学科にはそれ以外にも計量心理学のRamsay教授をはじめとして、auditory perceptionのBregman教授、社会心理学のLambert教授、言語発達のMacnamara教授など錚々たるmemberがそろっていた。特に自分に近い分野でRamsay教授のように世界的に著名な研究者がいたというのは実に幸運であった。彼はカナダのアルバータ大学で教育学の学位を取り、その後プリンストン大学のpsychometric fellowとなってPh.D.をわずか1年半で取ったという俊才である。そのような研究者の隣で30年もの長い間、自らを研鑽できたことは何事にも代え難い僥倖である。

既に述べたように私は授業の準備には最善を尽くした。『心理学ワールド』の57号でトロント大学の西里先生が「Ramsay教授が

私のことをあれほど講義の準備に時間をかける人は見たことがないと述懐していた」という話をされていたが、さもありなんとと思われる。私は1回ごとの授業を自分のtalkと考えることにした。したがってその準備は自分のtalkを準備するのと同じぐらい力を入れた。1回が55分でそれを1日おきに1学期13週間続けるのは大変なことであるが、私はそれをやり通した。私はtalkの準備の仕方にも自分のやり方があった。英語のtalkが苦手だという人は是非一度試してみたい。まずtalkの内容に沿ってslideを用意する。それから一つひとつのslideについてしゃべるべき内容を文章化する。その段階でslideの内容を変えたり、順序を変えたりすることもある。そしてその文章をほぼ完全に暗記する。またその段階で文章をより自然なものに書き換えることもある。slideを見ながら暗記すると長さにもよるが大体2,3回で暗記ができる。後はtalkの時、それが暗記ではなくごく自然に話をしているように聞こえるまで練習する。そしてできれば誰かの前で声を出して練習させてもらう。私は今でもこのやり方をかなり忠実に守っている。それは自分の中に成功感覚があるからである。talkで次に何をしゃべるかがわかっていると質問に答えるのにも余裕が出てきて自信につながる。このやり方は自分の学生にも試してみたが、一度も失敗したことがない（私が本当にtalkの原稿を書いているかどうか疑う人は私のHPに行ってみるとよい。HPの後ろのほうにtalkのslideがdownloadできるようにになっているが、slideの後にはtalk

の原稿も載せてある）。

正直言うと、私は長いことtalkするのが嫌で嫌でたまらなかった。上で述べたstrategyをもつてしてもtalkのたびにnervousになった。それがPh.D.を取ってから7年も続いた。ところが転機は意外と簡単に訪れた。1984年、1回目のsabbaticalからMcGillに戻った時、数学科でtalkを頼まれた。その時のtalkは自分でも感心するほどうまくいった。私はそれ以来talkでnervousになることはなくなったのである。

研究を重視する大学では如何に研究時間を捻出するかが重要課題となる。McGillの心理学科はteaching loadが低いことでも恵まれていた。1年で2コース教えればよく、1コースは週3時間の授業で、1学期13週間から成る。私は2コースを1つの学期に集中して教えることにしていた。すると、夏休みを含めて残りの39週間は研究に専念できる。

総括

私はこれまで殆どのことを短期決戦で乗り切ってきた。ここでいう「短期」とは長くて3年程度の期間を指す。それ以上の長期的な展望を持って行動してきたことはあまりない。私はこれまで人生の岐路に立って自分の進むべき道についてあれこれ悩んだという経験がない。こういう生き方を生きて、1度だけ危険なギャンブルをする羽目になったことがある。それは今から20年程前のことで、年老いた両親の世話をどうするかという問題だった。結局私は大きなリスクを覚悟で両親をカナダに呼び寄せた。この時も迷いはなかった。「盲、蛇に怖じず」とはよく言ったものである。